主　論　文　要　旨

ショーペンハウアー哲学における無関心の研究

鳥越 覚生

古来、利害関心からの離脱や我執を離れることを貴ぶ無関心（Interesselosigkeit）の思想は、洋の東西を問わず確認できる。しかし、市民革命と産業革命の二つの革命を成し遂げた結果、高度に発達した個人主義や利己主義が出現した西洋近代では、明確に「利害関心（interesse）」と利害関心の否定ないしは超克としての「無関心（性）」の概念が形成された。この「無関心」という言葉は、一般にシャフツベリやカントに始まるとされる。だが、日本語に限らず、カントの「無関心（性）」という表現は誤解を招きかねない。例えばヴィンデルバントは、カントの無関心（性）はシラーやショーペンハウアーによって、より適切な表現に改められたと考えている（Wilhelm Windelband, *Einleitung in die Philosophie*, Mohr, Tübingen, 1923, S. 365）。それにもかかわらず、〈ショーペンハウアー哲学における無関心の研究〉は従来の研究において主流となることはなかった。研究者たちは、もっぱらショーペンハウアーの美の形而上学においてのみ、カントとの関連からショーペンハウアーの「無関心」の概念について考察してきたと言っても過言ではないであろう。尤も、ショーペンハウアーの無関心に存在や真理への通路を見出した渡邊二郎の考察（渡邊二郎『芸術の哲学』ちくま学芸文庫、一九九八年）に先見の明を認められるが、ショーペンハウアーの哲学全体を「無関心」という観点から解釈する試みはなかったのである。

ところで、ショーペンハウアー本人が『意志と表象としての世界』（1819）の序文で自らの哲学を「ただ一つの思想」と述べたことから、ショーペンハウアー研究では彼の哲学体系をどのように整合的に読み解くかが問われてきた。とりわけ、ルドルフ・マルターがショーペンハウアー哲学を「救済論（Soteriologie）」（Rudolf Malter, *Der eine Gedanke: Hinführung zur Philosophie Arthur Schopenhauer*, WBG, Darmstadt, 1988）として読解して以来、ただ一つの思想を巡る論争は洗練され、現在も進行中である。そこで、筆者はマルターの解釈を受け継ぎ、ショーペンハウアーの救済論を無関心哲学として再構築することを試みた。それは次の見通しに依る。ショーペンハウアーの救済論は生存への衝動である「生きんとする意志（Wille zum Leben）」に囚われた人間が、その軛から離脱することにより、「意志の否定」と称される寂滅の境地に安らうことを概要としている。この一種の解脱論において障碍となる「生きんとする意志」が生存への「利害関心」と同義であることは研究者のなかで認知されている（Wolfgang Korfmacher, *Ideen und Ideenerkenntnis in der ästhetischen Theorie Arthur Schopenhauers*, Centaurus, Pfaffenweiler, 1992, S. 142）。とすると、「意志の否定による救済論」は「利害関心を離れ

る無関心による救済論」と読み換えることができるであろう。ここに、無関心哲学としてショーペンハウアーの救済論を再考する余白がある。とは言え、これは単なる言葉の置換ではない。「無関心」にはそれ特有の問題が伏在している。そして、無関心に独自な問題は、無関心を研究する困難にも連繋している。と言うのは、利害関心に囚われた私たち人間にとって、利害関心を離れて直観される無関心なものは「どうでもよいもの」だからである。従って、利害関心の領域が生きんとする意志に奉仕する人間知性の光に照らされた領域であるとすると、無関心の領域は人間知性が根拠づけできない暗冥とした領域となる。しかも、無関心の研究は、自己の生存を気遣うことでどうにかこうにか露命を繋いでいる人間として生きながらも、その生存への利害関心から瞬間的に離脱し、どうでもよいものに目を向けるという対価を必要とする。生存競争の只中で、生存競争から距離を置くという難行をし、それを反省することが無関心の研究のスタートラインなのである。

こうした困難に臆することなく、生存のために動き回る世界のなかで佇み、利害関心を離れて思索した哲学者がショーペンハウアーであったことを本論では提起した。この主張の眼目は、無関心は決して消極的で怠惰な態度ではないという点にある。これは同時に、ショーペンハウアー哲学の極点に位置づけられる聖者や世界克服者の「無上の無関心」に向けられた「無為である」(Albert Schweizer, *Kultur und Ethik*, Buchclub ex libris, Zürich, S. 298）といった批判や、あまりに悲観的であり、「社会的現実や実践からの遁走」（Georg Lukács, *Die Zersörung der Vernunft*, Aufbau-Verlag, Berlin, 1955, S. 186）であるといった非難への応答にもなる。人間が無関心の境地に遊ぶには、利害関心（interesse）が渦巻く生存（esse）の只中（inter）の危うい均衡のなかで、極度の緊張を持続する必要がある。要するに、各人各様に己の利害関心を追求するがゆえに「万人の万人に対する闘争」の舞台となっている悲劇的な世界の只中で一人、例外的に利害関心を離れてあるには、現実を直視するための大いなる緊張を要するのである。けれども、この無関心の積極性は、なかなか娑婆世界では認知されない。それは、利害関心に囚われた者にとって、無関心の領域は興味を惹かないからである。

では、この暗冥とした無関心の領域は具体的にはどうであるか。本論では、ショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』(1819) に依拠して無関心の領域を遍歴し、〈ショーペンハウアー哲学における無関心の研究〉を遂行した。その順路は次の通りである。

ショーペンハウアーはベルリン大学における講義で自身の哲学を認識論、自然の形而上学、美の形而上学、道徳の形而上学に整理している。ショーペンハウアーの無関心の研究領域も、この整理に対応させて追究することができるであろう。すなわち、認識論ならびに自然の形而上学における無関心、美の形而上学における無関心、道徳の形而上学における無関心の三つの研究領域が見出される。そして、本論ではこれら三つの領域の無関心をそれぞれ次のように区別した。

主　論　文　要　旨

（1）「真」を扱う「科学的ないしは哲学的無関心」

（2）「美」を扱う「美的無関心」

（3）「善」を扱う「無上の無関心」

ただし、（1）と（2）は分離して考察することがショーペンハウアー哲学の性質上、困難であった為、本論は大きく（1）と（2）を扱う第一部「哲学的無関心と美的無関心」と（3）を扱う第二部「美的無関心から無上の無関心へ」から構成されている。

第一部は、ショーペンハウアー哲学を「無関心」を切り口として解釈するための予備考察から始まる。ショーペンハウアーの認識論や感性論における「無関心な感覚」を文献学的に検討した後、それが日常に埋没している無関心な領域の基礎となっていることを明らかにした（第一、二章)。この発掘作業を起点としてショーペンハウアーの美の形而上学を照射することで、彼の認識論や美の形而上学が「無関心」を鍵概念として読解できることを示した（第三、四、五、六、七章)。殊に、第三、四章で剔出した「無関心」の基礎知識を応用して、第五、六、七章では、美的無関心の人間的性格が明らかになった。美や真理の世界は、現に私たち人間が生存する利害関心が渦巻く世界を抜きにしては語れないのであるが、感性的であると同時に理性的である人間が、動物的な生存に堕することなく、精神的な世界に遊び、利害関心を惹かない「どうでもよいもの」に眼を向けるのは容易ではないのである。

第一部の成果は「哲学的無関心と美的無関心」のどうでもよい領域として総括される。ただし、哲学と美学の二種の無関心を分離することは、ショーペンハウアー哲学の性質上、極めて困難である。二種の無関心が不可分であることは、「芸術としての哲学」（高橋陽一郎『芸術としての哲学　ショーペンハウアー哲学における矛盾の意味』晃洋書房、二〇一六年）としてショーペンハウアー哲学を読解できることを提起している研究者がいることや、ショーペンハウアーの影響を受けた若きニーチェが『悲劇の誕生』で悲劇芸術のうちに根源的な真理の開示を認めたことから傍証されるであろう。私見では、二種の無関心の相違点は、それらと相関関係にある対象（イデー）の範囲にしか認められない。すなわち、芸術家がある特定のイデーを観照するのに対して、哲学者は芸術家が個々別々に表現しているイデーの全体を視野に収める。別言すると、芸術が作品のモティーフとして世界の部分を扱うのに対して、「哲学だけが世界の全体を考察する」（Arthur Schopenhauer, *Vorlesung über die gesamte Philosophie oder die Lehre vom Wesen der Welt und dem menschlichen Geiste. Metaphysik des Schönen*, Felix Meier, Hamburg, 2018, S. 35）のである。

第二部は、ショーペンハウアー本人が、私たち全員の行動や生活に直結するがゆえに最も真面目なものと考える実践領域、つまりは善と聖の領域を扱う。よって、ここで考察さ

れる無関心は神秘体験という限りで非日常的であるかもしれないが、私たちの生存に影のようにつきまとう。また、第二部の無関心は決してショーペンハウアーが生きていた十九世紀の哲学に留まらない。私たち人間の生存に深く根差した問題、いわゆる人生の問いに関わるからである。従って、第二部の諸考察はそれぞれ「無関心」の現代性への問いといってよいであろう。

第二部の研究は次の手順で遂行される。最初に第一部からの導入として美と善の問題を考察し、美と善に共通する基盤としてショーペンハウアーに独自な悲劇的世界観、悲観論があることを確認する（第八章)。それから、悲哀に満ちた世界の中で、ショーペンハウアーがいかにして善や聖を考えていたかを明らかにする。それは、苦悩の只中における共同の問題（第九章)、希望と幻滅を経て諦観に達する人間観と世界観の問題（第一〇章）として開示される。これらの一連の考察により、自己の苦悩から遁走することなく、苦しみの世界の中で、利害関心から離れて現実を直視する透徹した眼差しがショーペンハウアー哲学に通底していることが明らかになる。とは言え、ショーペンハウアー哲学では、無関心は人間に飛来する一種の神秘であり、無関心な直観を磨く術は人間には定かではない。それゆえに、自己の利害関心に適った判明な領域のみに着目している利己的人間が、道徳的な善の領域を経て宗教的な救済へと到る冥冥とした過程を思慮するには何らかの手掛かりが要る。そのヒントが「禁欲」にあることは第十章で示唆されていた。そこで、「禁欲」を鍵概念として人間がエゴイズムを克服する可能性が問われる（第十一章)。第一部で縷説した様に、人間は利己を脱する過程で哲学や美の対象となる〈どうでもよいもの〉、日本語でいうところの〈幽けきもの〉への目が開かれる。さらに利害関心を脱して禁欲に到れたならば、最も暗冥とした聖者の隠れた善行の世界、いわゆる〈冥加〉の領域への扉が開かれることが、禁欲主義者の現行から仄聞される。これらの考察を踏まえて、最後に、ショーペンハウアーの救済論を彼の哲学の系譜を考慮しながら総括し、その深奥に「無上の無関心」を見届けた（第十二章)。

本論の第二部から、ショーペンハウアーの無関心哲学が聖者の「無上の無関心」を頂点としていることが明らかになった。また、本論の二部構成から、ショーペンハウアーの無関心哲学が「哲学的ないしは美的無関心」の上に「無上の無関心」を頂く二部構造をなしていることが明らかになった。かくして、ショーペンハウアー哲学における無関心の研究は、哲学的ないしは美的無関心におけるどうでもよいもの、幽けきものの広がりから無上の無関心の冥き深みへと向かうことが判明した。そして、この無関心に共通する特徴として、利害関心に翻弄される生存競争の只中で生きる身の上でありながら、利害関心に振り回されることをよしとせず、世界から距離をとり、悲劇的な世界を直視する大いなる緊張を確認した。ショーペンハウアー哲学における無関心は、隠れた積極性を有するのである。

以上